

平成 22 年 6 月

[配布先：全組合員]

市場情報

「日時」 平成 22 年 6 月 11 日（金） 正午～
「場所」 大阪「ラマダホテル」
「出席」 酒匂委員長他 16 名（最終頁参照）
「経過」

1. 酒匂委員長挨拶

多様化する仕入れソース

3 か月前と様相が一変している。スクラップ価格はユーロ安を起因して急落、様変わりである。ひも付き向け価格は難航しているようだ。反応すら示さない需要家もいると聞く。積み月により値段が決まるという値決め方式だが、対応が極めて難しい。電炉材が値下げとなれば、母材相場が多極化し、仕入れソースも、輸入材を含めて多様化する。お客が鋼材を選別する時代の到来である。シャーとしても、ユーザーとの対応の中でこの問題を考えていく必要がある。建機生産はピーク比 6 割まで回復してきた。しかし生産拠点の海外シフトが心配だ。トラックも足元堅調だが、排ガス規制前の駆け込み需要の反動減が心配だ。在庫の適正レベルを保ちながら、3 カ月ごとに変動しそうな母材の仕入れ、販売は難しいし、頭が痛い。シャリング業の在り方が問われているように思える。

2. 各地区の需要動向報告

北海道

人の役に立つコンクリートへ

花から祭りへ、例年にない遅い春が終わり素晴らしい新緑のもと、よさこいソーラン祭りや北海道神宮祭典など祭りシーズンを迎えた。

望むところは「季節も景気も最高」の初夏。だが、期待に反し気象は異常。そして、景気についても、回復の足取りが依然として弱い。信用収縮や雇用（有効求人倍率 0.35 倍）・

所得環境の一層の悪化、円高やデフレ、資源の高騰など数々の悪循環が大きな不安要素となっている。加えて、政権交代による政治・経済の混乱。財政事情の悪化に伴う公共投資の大幅な削減などで疲弊した経済に一層の痛撃を与え、企業を取り巻く環境は深刻度を増し不況一色の感じ。

公共投資の依存度が高い道内経済にとっては、「コンクリートから人」ではなく、「人の役に立つコンクリート」への早急な政策転換が声高く叫ばれている。

〔鉄 骨〕 道都・札幌を見渡してもタワークレンが一基も見えず、とにかく物件が見当たらない。建築不況は今年に入っても好転の兆しはまったく見えず、むしろ悪化している。道内建築統計 1～3 月実績から推定する鉄骨需要は約 27,000 トンで前年同期比 8.8%、3,000 トン少ない。また、需要の先行きを示す 1～5 月の共同積算数量は 44,994 トンで、前年に比べ 3.9%、平年に比べ 52%ダウン、統計史上最低レベルであった昨年をも下回った。

新年度に入り耐震補強関連が相当数順調に発注されているものの、民間物件は中・小型物件中心で大型物件はなく早くも夏枯れ現象も懸念され、ファブ各社の手持ち量・稼働率を改善する実需はまったく見えてこない。

〔橋梁〕 期待されたゼロ国・補正予算による発注は 1,250 トンで、前年同期比 67.5%減と見事に裏切られた格好。

今年度発注見込みは国と道を合わせ 10,000 トン。需要環境は、一段と厳しく老朽化の進んだ橋の延命・耐震対策や補修・補強としての落橋防止装置や鋼製床版工事などの早期発注が強く望まれている。

〔切 板〕 農業基盤整備・農業関連施設は政権交代で先送りされた。道央圏の大型プロジェクトについても今年は動きそうにない。

需要構造の中心である建築鉄骨、橋梁ともに回復の見込みは薄い。一部の有力大手ファブを除き工場稼働率は 30～90%。M・Rクラスの需要、とくに地方の新規物件が少なく厳しい状況が続いており供給能力を埋める需要はまったくあてにできない。

先行きの需要見通しは不透明で、我慢の時期が持ち越されそうな雰囲気。従って、数量的な枯渇感は一層顕著となり深刻度が増すものと憂慮されている。

切板の価格状況は、ゼネコンの受注競争が一段と厳しくなっており、鉄骨価格の下落によりファブからの指値は一層厳しさを増している。出血・値引きをしても大幅な受注増は期待できない状況である。

電炉・高炉・輸入材の切板価格と、本州ファブの道内ファブへの外注鉄骨切板価格“角重量単価・実重量エキストラ加算単価”（厚板母材価格含む）についても大幅な値差と情報錯綜が見られている。また、相変わらず超安値切板も散見される。

需要不振に加え切板受注価格の採算ラインを大幅に下回る販売は、厚板母材の大幅値上げにより今後、さらに状況の悪化が予想されるだけにより深刻な事態となっている。

高炉メーカーは、3月に値上げした厚板価格に続いて、6月契約からさらに大幅値上げ、「国債市況の先高基調に加え、鉄鉱石や原料炭を含む資源動向、フレートなど他のコストアップ分などを総合的に判断し追加値上げもある」と、発表した。内需色の強い建築投資は依然として低迷しており、復調の兆しが見えず需要不振の状況下、需要家に切板製品価格を粘り強く理解を求めるが、転嫁切板価格に対しゼネコンやファブの強力な抵抗がある。

シェアリング業者としては、需要家と充分対話、適正価格での販売に不退転の決意で挑んでいる。しかし、同時にメーカーからゼネコン、ファブの値下げ圧力に対し強力に値上げ交渉していかないと理解は得られない状況にある。メーカーの一層のご協力、ご支援をお願いしたい。

道内の建築業会は、長期にわたる公共投資の抑制と過当競争で疲弊している。与信問題は今後より一層深刻さを増しそう。また、需要不振による需給バランスを示す在庫率の改善も急務となっている。

(玉造・西村孝治)

東 北

仕事不足続く

東北地方は木々の新緑がまぶしい初夏の清々しい季節になって来ましたが例年よりも気温が低い日が多く農作物への影響が心配です。

東北地方の景気はいまだに厳しい状況が続いています。下北半島の大間原発関連工事が動き始め、そこそこの量がある様ですが、東北全体から見れば仕事量は不足しています。その他学校耐震工事が出ているものの、ロットは小さく手間の掛かる工事が多い様です。ファブの多くは50～70%の工場稼働です。

材料の値上げも始まり先高感があるのか、物件の引合いが僅かですが出始めて来ています。材料手配ではロールがタイトであり希望の納期に間に合わずに、受注に支障をきたしています。シャーにとっては非常にタイミングが悪い状況です。

首相の交代もあり、世の中の流れが少しでも良い方向に変わり、民間需要が旺盛になり一日も早くシャーの需要が回復して欲しいものです。

(J F E 鋼材・庄子悟)

東 京

冷え込む中小建築、橋梁

【全 体】

橋梁の低迷と鉄骨の急減により、シャー各社の稼働率は大幅に低下している。社によって差はあるが、臨時休業やシフト変更で何とか凌いでいる状況。在庫は過去3年間で最低レベルまで減少したが、需要の急減から在庫率はむしろ上昇している。

今後の動向は、橋梁が年内は惨憺たる状況が続く見通しであり、7月以降鉄骨が復活しても、年末頃までは極めて厳しい稼働・採算状況が続く見込み。

【橋 梁】

21年度の入札量が30万トン（前年比40%減）となったことや、補正予算の執行遅延による入札遅れから、各ファブとも受注が激減した。物件の前倒しもあったが、21年度4Qの切板数量は、例年に比し極めて低いレベルとなった。更に、足元4～5月の数量は、前倒しの反動もあって、過去最低レベルまで落ち込んだ。

22年度の入札量は、当初、過去最低の20万トン程度と見込まれていたが、21年度末時点では30万トン弱まで戻るとの見方が出された。しかし新政権誕生により、再び不透明な状況となっている。関東各ファブは、21年度下期入札であまり入札できておらず、盆前後までの線表がほとんど伸びていない。従って、各ファブとも案件の繰り上げや鉄骨へのシフトで稼働を維持している。新規案件の入札は、中部地方整備局の案件をはじめ7月頃から出てくるものの、生産は年末～年度末であり、シャーの生産も、足元から年内にかけ、極めて低いレベルで推移するとみられる。

【鉄 骨】

設備投資関連や中小建築案件の中止により、中小ファブの稼働は惨憺たる状況にある。

一方、首都圏の大型案件は、今のところ大きな計画変更もなく、Sファブ対象案件は高水準を維持しており、今年1月頃から工事が本格化している。但し、地下部が中心であり、鋼材所要の多い地上部が立ち上がるまでは端境期となっており、とくに1～3月はSファブの一部も臨時休業を取らざるを得ない状況であり、切板数量も極めて低いレベルとなった。

今後、地上部が本格化するのは7月以降とみられ、ファブの仕事量は、向こう半年～1年間程度は高水準が続く見込みである。

しかし、足元の仕込み案件が全く動いていないため、今の山が過ぎた後は再び低水準に陥る可能性がある。

また、高炉メーカーの大幅値上げの影響から、輸入鉄骨シフトが再び活発化している。ゼネコンは、一時品質面と国内価格の値下りから輸入鉄骨にメリットなしとの見方をしていたが、ここへきて輸入鉄骨の使用を再開している。国内鋼材使用量の減少につながる懸念があり、今後の動向を注視する必要がある。

(富士鉄鋼センター・井沢純司)

東 京

建産機、明るさ広がる

【全体】

内需は相変わらず回復力に乏しいが、旺盛な新興国需要に牽引された輸出の回復で限定的とはいえ受注に明るさが見え始めている。リーマンショック以降、各シャーは生産能力を一気に落としており、この回復で稼働率としてはかなり高い水準まで戻りつつある。

一方で需要家は、為替のリスク回避やコスト削減から、海外調達・生産の海外シフトを一層強化する傾向にある。これに伴う、空洞化による市場の縮小と原価低減要求は、我々シャーにとって今後の生き残り策構築が喫緊の課題となっている。

【建設機械】

建設機械の4月出荷額(日本建設機械工業会調査)は、前年比+64.5%で4ヵ月連続増。昨年の低迷からの反動で、当然の結果と言えるが、増産機種がショベル系のみだったが数ヵ月遅れで他機種に拡大していることは明るい展開といえる。

油圧ショベル

外需は、新興国向け輸出が好調、内需は、中古機械市場の活性化と排ガス規制対策の買換えで内外需とも増加。シャーの受注は概ねピーク時の 60%程度まで回復。

建設用クレーン

ショベルの回復から3ヵ月程度遅れての回復であるが、足元の受注はピーク時の 45%前後とみられる。クローラークレーンの低迷が長期化しているが、ラフテレーンクレーンは買換え需要や中近東・ロシア向け輸出案件が増加しており、09 年下期以降生産は漸増傾向。

鉱山機械

世界的な資源需要回復から鉱山機械の輸出は急回復。特にインドネシア・ベトナム向けは極めて堅調。鉱山用ダンプ・大型ショベル・ホイールローダは、ピーク時の 60%の生産水準まで回復している。

【板金・鍛圧機械】

板金機械は、輸出増で、本年1月以降受注が急回復。4～6はピーク時の 60% まで回復の見込み。

プレス機械は、小型・中型機を中心に回復基調にあるものの、自動車向けの大型プレスは、回復の実感を持つまでには暫く時間を要すると思われる。プレス機械全般では、4月の受注はピーク時の約 45%となっている。

【重電】

重電は、これまでの堅調さから一変し、10年度上期は低迷が続くそう。下期以降に期待したいが、原発以外は受注自体が減少しており、また需要家の海外調達により国内生産に繋がらないケースも増えている。産業用モーターも生産計画は漸減傾向にあり、この分野も為替の影響を受けている模様。

【産機店売り】

産機店売りでは、建機向けハイテンの受注が増加しているものの、その他内需中心の分野では、5月以降は前回報告時より一段と悪化している。値上げ前の先行手配が一段落したことや、設備投資抑制など内需縮小の影響が大きいと考えられる。また素材価格値上げの転嫁交渉も非常に難航しており、受注減との二重苦の深刻な状態に危機感を抱いている。

(ニューエイジ・池田啓志)

東 京**ご安全に！**

建機の復調もあって、4～6月に漸く大底を脱した感がある。7～9月以降は、大型建築案件の地上部が動き出すので大手シャーは一息つくかもしれないが、中小シャーは厳しく、設計変更等で後ズレになり秋口以降に持ち越しそうである。短納期・小口中心の引き合いが多く、中小シャーの稼働は30～40%と極めて低い。何とかしなければと思うが、各地のファブ倒産が多発し、与信問題も深刻化していることから心理的にさらに圧迫されてきている。中小シャーは身の置き所がない状況である。皆さんご安全に！と言うしか言葉がない。

(丸東興業・秦弘志)

東 京

母材価格 2 極化で手が出ない

浦安地区の各シャーは、全体的に需要が低迷している中で、各社に温度差はあるが、概ね 1 日～2 日の短納期での稼働状況。母材定尺販売は 3 月～4 月にかけて、多少の仮需の影響もあって多少動いたが、5 月～6 月の引き合い・荷動きは再び悪化している。現在、とくに高炉品の荷動きが悪く、ほとんどが東鉄指定という傾向になっている。4～6 月契約で値上げされた母材が入荷されつつあり、価格転嫁しなければならないが、足取りは厳しい状況となっている。

中板も厚板母材定尺と同様、荷動き、価格とも足踏み状態で、足元販売減が続いており、多少タイト感に欠けている。

在庫は概ね調整は取れているようで、大きな変化はない。

全体的には、先が見えないまま夏場までこの状況が続くと思われる。また高炉材の 7～9 月値上げは納期と価格面で手当てができないと思われる。東鉄と高炉材の価格差がさらに広がり、極めて厳しい販売・採算状況を余儀なくされそうである。

(三ノ橋鋼材・角田善彦)

東 海

市場の秩序を早く取り戻せ

4～5 月と仮住が出たが、5 月からパタッと止まった。シャーの稼働も 3 月に 60～70% まで上昇したが、6 月は 30% と元に戻ってしまった。在庫は 1.0～1.3 カ月程度で推移し、調整は進んでいる。一方切板の価格転嫁に取り組んでいるが、メーカーの値上げに追い付かない。仲間売りマーケットが混とんとしてきており、仕事の取り合いが激化するなど、殺伐とした雰囲気になっている。建機は 50～60% まで戻し、トラック、プレス関連需要も徐々に回復しつつあるが、昇降機はピーク比 40% 程度にとどまっており、低レベルのままである。機種によりバラツキがある。全体としては仕事がなく、価格転嫁も進まず、ユーザーからの値引き要求が依然根強い。採算はさらに悪化している。

もう一度市場の秩序を取り戻し、名古屋の良さを発揮しないと皆が共倒れになってしまう。

(鈴将鋼材・鈴木康司)

東 海

体力かなり消耗

東海地区の橋梁・鉄骨需要は、全国的に一番少なく、ファブの夏場以降の仕事が

ほとんどない状況である。メーカーロール枠の規制が厳しく、納期はかなり遅れている。また、ファブからの指値も厳しく、母材値上がり前の価格対応を迫られている。外材が使われる建築案件が増えている。必要なメーカー値上げで、価格転嫁もできない。今後もシャーの仕事がないまま推移しそうだ。シャー各社の体力はかなり弱っており、限界点にある。

(中部鋼鉄・加藤一修)

大 阪

先行き暗い

3～4月と値上げを見越した仮需が出たが、その後先高感も薄らぎ低調に推移しており、シャーの4月出荷量は前年比28%減と激減している。先行きも暗い。メーカーはフル操業状態が続き、2極化している。メーカーの相次ぐ値上げを受けて、価格転嫁を進めるも捗捗しくなく、川上と川下の価格差がますます狭まっている。建築は、4大物件中心(うち郵便局は凍結)に動いているが、新規案件が見えず、先行きが心配。建機は増産に転じたが、鋼材手配に苦慮している。シャーの工場稼働は50～60%程度。また、最近建築用鋼材の品質管理面で、設計会社等のチェックが相当厳しくなっている状況。

(シーヤリング工場・佐々木泰司)

九 州

鋼材値上げがもたらすもの

九州地区の4月の小売店販売額は、全同月比4.4%減(21か月連続)と、全国平均の3.0%減を上回っており、個人消費は低迷が続いている。

シャーの稼働は各社それぞれ違っているが、あえて言えばおおよそ50%前後と、回復は見られない。

九州の建築着工床面積は、3月に前年比プラスに転じ、4月もほぼ横ばいと明るさが見られる。しかしながら建築物件の案件が、低調ながらも、本格化するのは7月から8月にかけてともう少し時間を要する。本年度は最低レベルの昨年と比べると、大型案件の着工により需要増が予想されている。

橋梁は当初予想を上回る出件が期待されているが、受注に積極的なファブとそうでないファブと2極化されており、山積み状況はまちまちであるが、総じて低水準であることに変わりはない。

造船業界は、世界的には今年に入り少しずつ明るさが見え始めている。船舶のキャンセル

も相変わらず出ているが、ばら積み船を中心にキャンセルを上回る新規発注（中国・韓国が中心であるが）が行われる状況も見られるようになってきた。国内でも、キャンセル一辺倒であったものが、ぼつぼつではあるが、新規受注も見られるようになっている。

しかしながら、厚板の主要分野である設備投資関連は、低迷が続いている。企業業績は上向いているにもかかわらず、国内向けの設備投資にお金を回さず、設備投資には慎重な姿勢がうかがわれる。

今後の課題としては鋼材の値上げ問題があげられる。スケジュール値上げが実行されると、従来の需要分野が変わってくる可能性がある。建築物・橋梁はRC構造に変更され、船主は船舶の発注を見合わせることでありかねない。厚板を取り巻く需要構造の変化が起きないことを祈らざるを得ない。

(豊鋼材工業・橋本勝美)

3. 高木理事長の感想

景気・経済情勢はますます高速度で変化しており、状況を注意深く監視しなければならない。当シャア業界は、宿命的ともいえるが、メーカーと需要家の板挟みで身動きがとれない状況にある。しかし我々は双方に言われっ放しでは駄目だ。毅然とした態度で臨むことが大事である。メーカーに対しては3カ月毎に母材価格が変動する中で、デリバリーを今の契約月から出荷月に変更し、納期も短納期化してより実態に沿った契約ができるよう、事あるごとに要望してゆく必要がある。ファブに対しては、現在鉄建協と協議中であるが、昨年末策定したガイドラインに基づく品質証明方法を実際に運用に移すべくハッパをかけているところである。最近、異材混入問題が発生し、工事がやり直しになったと聞いているが、こうした事態が起これぬようコンプライアンスの厳守をお願いしたい。

(参考) ≡ 出席者 ≡ (順不同敬称略)

酒 匂 委 員 長(京浜産業)

ゲスト 高 木 理事長 (富士鉄鋼センター)
" 木村大阪支部長 (日鉄神鋼シャーリング)
" 山 崎 理 事 (山崎シャーリング)
北海道 西 村 (玉 造 株)
東 北 庄 子 (J F E 鋼材・仙台)
東 京 秦 (丸 東 興 業)
池 田 (ニューエイジ)
井 沢 (富士鉄鋼センター)
東 海 鈴 木 (鈴 将 鋼 材)
加 藤 (中 部 鋼 鋸)
大 阪 佐々木 (シーヤリング工場)
棚 橋 (株玉造)
九 州 白 水 (門倉剪断工業)
橋 本 (豊 鋼 材 工 業)
事務局 柘 野

市場委員会の次回開催予定

第回市場委員会

9月10日(金) 正午～

於・名古屋